



吉田博《エル・キャピタン》木版 大正14(1925)年 千葉市美術館蔵

展覧会のご案内 2016.4 ▶ 2017.3

「生誕 140 年 吉田博展」

4月9日(土) ▶ 5月22日(日)

国内外の風景画を描いて活躍した画家の代表作に初公開資料をあわせて 300 点超を紹介する大回顧展。

同時開催「四季のうつろい・時のうつろい」

吉田博《日本アルプス十二題 劔山の朝》千葉市美術館蔵



「ふたつの柱—江戸絵画／現代美術をめぐる」

6月1日(水) ▶ 6月26日(日)

千葉市美術館の特徴的なコレクションの中から江戸絵画と現代美術を様々な切り口で紹介。

左:中西夏之《作品—たとえば波打ち際にて IX》千葉市美術館蔵
右:曾我蕭白《獅子虎図屏風》左隻 千葉市美術館蔵



「河井寛次郎と棟方志功： 日本民藝館所蔵作品を中心に」

7月6日(水) ▶ 8月28日(日)

民芸運動を初期から支えた 2 人の画家の美意識を、貴重な作品と資料約 200 点から展覧する。

同時開催「河井、棟方の周辺—所蔵作品の現代美術に見る」



棟方志功「華嚴譜」より
《18・風神》
日本民藝館蔵

河井寛次郎
《辰砂丸紋角瓶》
日本民藝館蔵

特集

「生誕140年 吉田博展」

担当学芸員に聞く！「吉田博ってどんな人？」
山男子に聞く。

「ふたつの柱—江戸絵画／現代美術をめぐる」
ただいま準備中！

連載

ボランティア日和

information

展覧会のご案内

いってみよう！やってみよう！～千葉市美術館ワークショップのご紹介～

「見立ての手法—岡崎和郎の Who's Who」

9月7日(水) ▶ 10月30日(日)

1960年代頃から個性的でユーモアあふれるオブジェを制作してきた現代美術家・岡崎和郎の展覧会。



岡崎和郎《P.M.ボール》個人蔵

「小川信治展—あなた以外の世界のすべて」

9月7日(水) ▶ 10月30日(日)

フェルメール、ゴッホなどの名画や観光名所など見慣れたイメージを描き直す現代美術家による首都圏初の個展。



小川信治《オーヴェールの教会2》作家蔵

「文人として生きる

浦上玉堂と春琴・秋琴—父子の芸術」

11月10日(木) ▶ 12月18日(日)

江戸時代後期を代表する文人画家の親子を、知友との交流をたどりながら総合的に紹介。

同時開催「父子の芸術ものがたり—所蔵 江戸時代の美術より」



浦上玉堂《山紅於染図》
愛知県美術館木村定三コレクション
重要文化財

「ブラティスラヴァ世界絵本原画展 —絵本の 50 年 これまでとこれから—」

2017年1月4日(水) ▶ 2月26日(日)

隔年開催される世界最大規模の絵本原画展から受賞作などを紹介。記念の年に絵本の歴史 50 年を振り返る。

同時開催「春を寿ぐ 所蔵浮世絵名品展」



ミロコマチコ『オレときいろ』より原画
©ミロコマチコ

第48回 千葉市民美術展覧会

2017年3月4日(土) ▶ 3月24日(金)



《穂高山》油彩 大正期(1913-26) 個人蔵

担当学芸員に聞く！

「吉田博って どんなひと？」

——今回インタビューするにあたって、出品作品の画像を眺めてみたのですが、すごく山に登りたくなりました。展覧会の準備をしながら、そう思いませんか？

全くありません(笑)、私海派なので。

でも、吉田博の作品を見て、「登りたい」とか「ここはこの前行ったあそこだ」というように、記憶をたどって幸せな気分になるとか、結構多いんですよ。実際、山男で吉田博の作品が好きで持っている人はかなりいます。なぜなのでしょうかね？日本の風景画で山の絵というのは結構あるわけでしょう？博の山の絵が、とりわけもし魅力的だとすれば、それはどういったところでしょうか。

——それは、やっぱり・・・、登った人でなければ見えない景色なんですよ、あれ。私は長いこと高山に登るといふ楽しみを忘れていたのですが、「ああ、こうだよ」と思いました。この視界のひらけ方だったりとか、すごくリアルに描かれているのかなあ、と。

博は、もう徹底した現場主義で、現地に行くというだけでなく、自然の中で季節の空気なり気温なりを感じながら、その中に身を置いて描くのでなければだめだという人でした。たとえば、ストーブを炊いた暖かい部屋から眺めて描くということなど許さない。それが雪山であろうとなかろうと、その姿勢は貫いたわけです。

だからその分、非常に贅沢な山登りをしている、何人も手伝いを連れて行きます。山のガイドはもちろん、荷物を持つだけの人も何人も。自分は空身で、自分の体を動かす以上のカロリーは一切使わずに、絵を描くことにだけ専念するという。だから、危険を冒して登山家のように困難な道を分け入ることはしないし、天候が悪くなりそうなのにあえて登ってみるとか、そういうことも絶対しない。

——天気良くないと描けないですね。

そう。だから、2ヶ月とか南アルプスにこもったり。

お金はかかったのでしょうか。ただ、衣食住には贅沢な人ではなかったもので、お米と、お味噌と、お塩だけ持って。まあちょっとした缶詰とかも持って行ったようですが、現地でイワナを釣るとか、ウサギを獲るとかしたんですね。実際、そうした獲物のスケッチ、「昇天したウサギの図」みたいなのがあったりするんです。山の案内人の中には、熊獲りの名人とかもいたので、もうちょっと豪華な食事にもありついたらかもしれません。でもそうやって、自分は絵を描くこと以外の体力を使わず、ひたすらこう、待つわけです。

——好機を待つんですね。

望む瞬間を。「晴天の○○」とか、そういう、絵になる瞬間です。

——まるで山岳写真家みたい。

どここの夜明けの瞬間とか、雲海から日が昇る様子とか【図1】。そういうのを、とにかく待つという。自然のありようを全面的に受け入れて自分は絵筆に徹するというか【図2】。つねに余裕を持った日程で行くんですね。今みたいに、パソコンで「ヒマラヤ」って画像検索するとバンバン出てくるような時代ではなかったし、カラー写真で山頂からの眺めを撮るようなこともおそらくまだないので、描かれたものの意味が全く違うということになりますね。



【図1】《雲海に入る日》油彩 大正11(1922)年 個人蔵



【図2】写生帖より(駒ヶ岳山頂からの眺め) 昭和2(1927)年頃 個人蔵

——当時の登山は、どんな装備でしたか？ほら、下駄で登った人(=川瀬巴水のこと/2013年度に当館にて回顧展を開催)の話が前ありましたが。

詳しいことはわかりませんが、ただ、3度もアメリカに行った人なので、最新のテントとかそういう情報はあったんじゃないでしょうか。準備できることは準備して登る。無謀なことは絶対しない。下駄で登るだの、草履で登るだの、軽装で登るということは多分なかったでしょう。余裕を持って登ってこそ、プロ。だから、他の人に対するのとは違って、山のガイドの言うことだけはちゃんと聞くんですって。それで、自分のとっておきのウィスキーとかを山に持って行くわけですが、その案内人にだけはちょっと舐めさせてあげる、とか(笑)。

すごく若いときにアメリカへ行って成功して、お金もあつたし、絵には絶大なる自信を持っていたし・・・。

——セルフ・プロデュースの人でしょうか。若い頃から外国に行って作品を売る。売れる絵と、売り込み方を知っている。ツテはあつたとしても、なかなかできることではないと思います。

日本では貧乏な画家や夭折の画家がより取り上げられたりしますが、そういった絵描き像とは対極にあるといえますね。

——リサーチもしたんでしょうね。今どういう絵が求められているか、とか。

もちろんです。23歳でアメリカへ行くのですが、そのときも、横浜の土産物屋さんでアメリカ人が水彩画をよく買うという情報も得た上で、渡航するんです。アメリカでどういう絵が受けるかということは、よくわかっていた。その点、とても戦略的で、それがそこまで当たるとは思っていなかったにしてもね。そういう意味では挫折がないし、だいたい当時長く留学していた人というのは、日本に帰ってくると西洋のテクニックを日本の景色

(東京国立博物館蔵)という、女性の裸体とひれ伏すライオンという不思議な絵があるんですけども、それはたぶんヨーロッパのサロンの絵を見て「洋画の王道というのはこういうものか。自分のテクニックで挑戦してみるか」と思ったからでしょう。とはいえ、評判は芳しくなかったのも、その後一切ないですね。

——勝負しなくてもいいところではない、という(笑)

しないしない。悪あがきしない。そういう人ですね。大きな挫折もなさそうです。現在あまり評価が高くないのは、日本人好みのそういう葛藤や絵描き特有のエピソードがないからかもしれません。

絵の腕を見込まれて吉田家に養子として入りますが、20才そこそこで養父が亡くなってしまい、義理の妹や弟、義母の計6人を背負った大黒柱として家計を支えなくてはならなくなります。なりふり構わず勉強をし、土産物屋で売れるものを描いて売った、そういったところがたぶん基本となっているわけです。だから外国人に売るということは、若い頃からごく普通のこと、そういう文化間のギャップみたいなことを武器にするということも、おそらくずいぶん早くから気づいていたのでしょう。もちろん水彩の腕も、不同舎の仲間うちでは抜きん出ているようですが、早くからプロにならなければならなかった追い込まれ方が違います。

海外への渡航や山へ行くための資金も、最初こそ借金しましたが、誰かに出してもらおうのではなく、自ら作品を売ったお金をそこへつぎ込んでいた。

——肖像写真【図3】を見ると、晩年になるまで裸眼だし、姿勢も良いし、日焼けしていて、本当に画家ですか？という感じがします。

アスリートみたいな感じですよ。60歳まで毎年日本アルプスに通ってました。もちろん自力で。たぶん体脂肪率も非常に低かったと思います。宴席は嫌いだし、お酒で失敗することもない。言ってる悲しくなってくるけれども、「トンカツ好き」とか、そういうこともたぶんない・・・。娯楽としての食みたいなのは、なかったと思います。

あんなに健康そうな絵描きって・・・と思いますが、逆にそれが私にはけっこう面白かったです。こういう絵描きもいるんだ、と。日本の近代の絵描き像の逆を行くみたいな。

——もしかしら、すごく現代的なのかもしれない。

に当てはめるのが非常に難しく、壁にぶち当たったりするわけですが、そういうこともないんですよ。

写実という意味ではブレなかったというところは大きいですね。当時はやりの象徴主義的なものとか、表現主義的なものには一切見向きもしなかったし、自分がきれいだと思うものをあえて曲げて描こうとは絶対思わない人でした。

——自分の中にある何かを表現したりとか、そういうのではないですね。

そういうのには、全く興味がない。これだけ人間を描いていないのは、たぶんそういうことで、自分の内面のドロドロしたものを描くとか、他人のそういうところにも、全く興味がなかった人だと思います。人物描写はきわめて少ないし、肖像もほとんど描いていません。

——風景の一部として必要だから入れた、みたいな。

そう。そして多分外国人の視線を意識して。たとえば「東京十二景」みたいなものに和服の女性を入れるとか。でも1点だけ、明治42年に《精華》

吉田博展

そうですね。セルフ・プロデュースとさっき言ったけれども、そういう意味では本当に。関東大震災以降、被災した太平洋画会の救済のために水彩画を800点もアメリカへ持って行ったらしいんだけど、それほとんど売れなくて……。わずかに持って行った木版画が大評判だったらしい。ただそのとき持って行ったものに関しては自分では納得がいかなかったようで、次はもっと良いものを作って売りたい、と。1920年代後半～30年代にかけては専らアメリカでそれを売っているんですね。



【図3】吉田博 肖像写真

____すごい情報収集力ですよ。今みたいにインターネットもないし。

最初に渡米した明治32年当時、ボストンには古美術商の日本人もいたんですね。あとは、日本ですでに知り合っていたチャールズ・ラング・フリーア(フリーア美術館創設者)や、デトロイト美術館の館長さんとか、何人かキーパーソンみたいな人がいて、直接やりとりをしていたようです。

吉田博は若い頃に、ジャポニスム全盛のパリ万国博へ行ったり、明治末から震災後にかけて3回欧米をまわっているんだけど、その頃日本美術は結構人気があったので、「日本には浮世絵とか日本画とか素晴らしい絵の伝統があるのに、なぜ君は洋画をやるのかね?」「日本人なのに西洋人の模倣をするのか?」とよく聞かれたそうです。

「じゃあなぜ自分は洋画をやるのか」と考えた。

ヨーロッパでサロン絵画とか万博とか実際に見ているので、本格的な油絵では、日本人である自分は絶対に追いつけないということ、早くに自覚したのではないのでしょうか。山は山で、登る人しか描けないというところに、オリジナリティがあったのかもしれない。また、後半生の木版画は、やはり洋画家としての自分が日本の木版をやるというところにオリジナリティがある。早い時期から、そういう、世界の中で自分のオリジナリティを確立するにはどうしたらいいかというようなことは、ずいぶん考えていた人だと思います。

____そこで悩んで悶々としてつぶれてしまうのではなく、次の手を考えて行く、状況を読んで、自分をプロデュースしていくわけですね。

もちろん絵描きとして、どの分野でも人を納得させられるよう、高い技術を身につけていた。その上でのプロデュースということです。

____版画についても、すごく厳しかったんですよ。

自分でも彫って摺れるくらいまで、短期間に研究をしていました。当時の摺り見本など見せてもらったのですが、おそろしく緻密なものでした。6枚の版木の表裏に、70～80色という色を入れて、摺る手順とかも考えて色分けをするのは博の仕事だったわけですからね。昔は彫師の仕事でしたが、そこは絶対自分がやると譲らなかったようです。他人に任せるのは作業だけ。彫師と摺師の横にいて、じっと見て監督していました(笑)

____何十回も摺っているのに、版木は6～7枚?

基本6枚。その裏表だけなんです。ただまあ、回数は多いものでは96回とか摺っているらしい。平均しても30数回。しかもサイズも大きいです。

____千葉市美術館のコレクションでは近代版画の枠の中ですが、なんだかそこには収まりきらない感じがします。

そうですね。だからよく、「川瀬巴水と吉田博」と並べられてしまうけれども、じつは全然違う。作品だけ見ると、全然違うとは思わないかもしれ

ません。単純に、風景で、日本の木版で……と見てしまえば、共通点ばかりを眼が拾ってしまいます。今回お話ししたようなことを考えないと、見方は変わりませんね。でも、完全に違うと言えますし、博自身もそう思っていたと思います。

巴水が好きだから博も好き、という人もいますが、近代版画のなかでも博は特異な人で別な立ち位置にいます。そういった全然違うところも見えてくると面白いですね。アメリカでの評価というのも結構普遍的な問題だと思います。版画だけに限らず、日本という国を考えるにあたっても。

____木版画以外の作品もけっこうあります。

今回は、初期の水彩画を多く集めました。とてもきれいですよ。水彩絵具の使い方をじつによく分かっていた人で、同時代の絵描きの中でもすばらしいと思います。

____水彩に始まって、最後はやはり水の木版画に戻って来た。

水彩顔料の使い方に関しては、やはり水彩画で鍛えた勤があったのでしょう。日本の木版画は、水性顔料をいくら重ねても濁らないんですね。ある程度厚さのある和紙に吸い込んでいくので。水彩画に近い喜びがあるわけです。博は絵の修行を始めた当時の水彩画って、特別な意味があったと思います。日本人にとってやはり油絵は難しかったので。博はたぶん三宅克己の水彩画を見て、「ああ、こんなに明るい絵が世の中にあるんだ」と思ったのでしょう。だからこそ、若かりし頃の水彩への感動みたいなものを、再び木版画でかたちにしたということかもしれません。このあたりは、展示室でご覧いただきたいところです。

(話し手：担当学芸員 西山純子)

山男子に聞く。

この絵はいったいどこから見た風景なんだろう? そんな疑問を、ポスターを眺めながら山好きの職員に聞いてみました。立山から眺めた剣岳だろうということに始まり、登山ルートや描かれた氷河(三ノ窓氷河、小窓氷河)について、話が広がりました。立山は現在、ロープウェイやトrolleyバスを使って登ることができます。それなら私たちも、この絵と同じ風景を眺めることができるのでしょうか。

____立山に行くとしたら、今は歩かないで行けるじゃないですが、ロープウェイとか使って。そうやって、この景色が見える位置まで行けるんじゃないか?

いや。そこから半日くらい、ちょっと登って降りないと、あの場所には行けないんじゃないかな。ロープウェイは室堂までしか行かない。室堂は立山の雄山のいちばん下だから、そこから雄山に登るのに2時間くらい。雄山へ登るための基地、平らになったところが室堂なんだよね。そこ(室堂)からはこうは見

えないと思うよ。剣は見えるけど、手前の山が邪魔をして、上のほうしか見えないんじゃないかな。

この話には、後日談があります。どこから眺めているんだろう……ということがやはり気になって、インターネットで調べてみた、とのこと。

画像検索をしたら、1枚だけこの絵に似た構図の写真があったけど、それは鹿島槍から撮った写真だった。だからこの絵も、剣の東側から見てるんじゃないかな。鹿島槍から五龍へまわるあたりの縦走路の途中から見た景色かもしれないね。

「どこから眺めているんだろう?」吉田博の作品を見ると、そんなことをつい考えてしまいます。画家の視点を想像しながら作品を見ていくのも楽しいかもしれません。

(話し手：元事務長 初芝泰雄)



《日本アルプス十二題 剣山の朝》木版 大正15(1926)年 千葉市美術館蔵



周辺地図

ふたつの柱

—江戸絵画／現代美術をめぐる

ただいま準備中!



【図1】伊藤若冲《雷神図》千葉市美術館蔵

本展覧会では、当館のコレクションの「江戸絵画」「現代美術」の中から作品を選んでご紹介します。昨年着任した新米学芸員2名の新鮮な目でコレクションを見つめ直した展示です。

お馴染みのあの作品も、ご無沙汰の作品も、あらためてお楽しみいただければ幸いです。

(本文中M=松岡まり江／江戸絵画部分を担当、H=畑井恵／現代美術部分を担当)

(M)：ふと気が付けばオープンの日にも徐々に迫ってきていますが、出品作品もだいぶ固まってきましたね。

(H)：今回は7・8階2フロアある展示室をすべて使った所蔵作品展なので、結構な点数が出品できますね。現代美術のコレクションは大きなサイズの立体、数の多い連作、絵画も大画面のものが多く、こういった機会にこそ展示できる作品がいろいろ登場します。

(M)：8階では現代美術、江戸絵画を別々に展示して、7階ではテーマに沿って取り合わせるという展示構成になりました。取り合わせのテーマは、最終的には「風景」や「モノクローム」などオーソドックスなものに落ち着きましたが、試行錯誤がありましたよね。

(H)：そもそもの企画意図は、江戸・現代の美術と一緒に展示することで、いつもと違うシチュエーションで、個々の作品を改めてじっくり見ても

らう機会にしようということだったので…。

(M)：拘束力が強いテーマよりは、緩やかに作品同士がリンクするようになってほしいですね。

(H)：どのように作品を選びましたか？

(M)：江戸絵画のみで構成するゾーンはまず、梅雨から夏にかけての時期にふさわしい作品を選びました。展覧会タイトルの「柱」ということばから、日本の美術が大切に描き継いできた四季や自然へのまなざしを連想しています。あとは、現代の作品に負けないパンチがほしかったので、あそびのある作品を集めました。《雷神図》【図1】のように直球でユーモラスなものから、見立絵のように知的な遊びを含んだ作品まで様々です。取り合わせゾーンは、現代美術の出品作に合わせて選んだものが多いかな。畑井さんはどうですか？

(H)：松岡さんと同じく、江戸絵画と並べた時に、普段とは違う見え方が生まれることを期待して選んだ作品が多いです。2人で「どんなの出す?」「だったらこんなのも」と話し合いながら、中身が詰まってきた感じですね。あとは、四季や自然といった日本美術のまなざしにつながるような作品も【図2】。モノクロームや無題の抽象絵画に季節感を見出したり、何かイメージが想像できたりしないかなということも意識しました。難しい、どう見たらいいのか分からない、と言われがちな現代美術を楽しく見てもらえるような工夫を考え中です。

(M)：最後におすすめの作品があれば教えてください。私は久しぶりの展示となる、呉春《漁樵問答図》や高嵩谷《渡舟雨宿り図屏風》を展示室で見ることが楽しみです。

(H)：ダン・グレアム《円形の入口のある三角柱(ヴァリエーションE)》や山口勝弘《ヴィトリノ：風景 1958》といった、十数年ぶりに出品する立体作品は見どころかと。久々の組み立ては緊張しますが、いずれも光を取り入れた作品なので展示場所や周りの環境によって見え方が変わってくると思い、私もとても楽しみにしています。

(M)：2人で話しているうちに士気が高まったような気がしますね。

(H)：引き続き準備頑張りましょう!

「ふたつの柱 -江戸絵画／現代絵画をめぐる」

会期：2016年6月1日[水] - 6月26日[日]

休館日：6月6日[月]

関連イベント

市民美術講座『「ふたつの柱」のむこうがわ』

講師：畑井恵、松岡まり江(当館学芸員)
6月11日(土)／14:00～(13:30開場予定)／11階講堂にて／先着150名／聴講無料

鑑賞ワークショップ「いっしょに見るとたのしいね(^^)」
6月4日(土)、6月18日(土)／各日14:00～(1時間程度)／展示室にて／各回先着10組(20名)／参加無料(ただし観覧券が必要)／対象：小学3年生以上／事前予約制(申込方法は本展チラシまたは当館HPをご覧ください。)

ボランティア日和

この4月でボランティア活動も3年目に入る。この2年の間にはギャラリートークを何回かさせていただいたが、鑑賞教育のリーダーを主に活動している。作品理解のために色々調べるのは面白いのだが、先輩のトークノートの緻密さとか皆さんに伝えたいという強い思いとかを知り、自分はまだまだ課題満載だなあと感じている。

子供達と一緒に会話を通して作品鑑賞をするのが鑑賞リーダー。この会話を通じてというのが難しい。期待一杯の子供だけでなく、来たくて来ている訳ではない、授業の一環として来ているだけの子もいる。関心の無い子にも発言を促し、みんなで話を膨らませようとするが、みんなの言葉がなかなか出てこない。まず、子供達との最初の接触に、どういう言葉をかけようかと考える。学校のHPを見て直近の行事や生活環境をチェックしたり、その展覧会と子供達との接点を探したりと、子供達に寄り添うポイントを探す。その学校の校歌の歌詞まで把握していた仲間もいる。作品理解のために調べた内容をどう解りやすい言葉にするか? 日本美術では、時代や室内調度品等

を知っているかも確認する。核家族化やマンション住まいで和室の無い家庭も増え、知らない子も結構いる。子供達との作品鑑賞は楽しいのだが、終わった後落ち込んでしまったこともある。だが、逆に、本当に幸せな気持ちにしてもらえることもある。

数少ないトーク経験だが、お客様から笑いながら「ボランティアさんのトークはボケ防止に良いですね。」という言葉がいただいたことがある。確かにトークはボケ防止に役立ちそうだし、鑑賞リーダーは子供達から柔らかな感性と、元気をわけてもらえる。残念ながらワークショップには参加できていないが、企画力とか協調性などが養われるのかも知れない。

あれ? なんだか、自分の為のボラ活動?

【美術館ボランティア 浦すみえ】



展示室でグループ鑑賞の準備をするボランティアメンバー

いってみよう! やってみよう! ～千葉市美術館ワークショップのご紹介～

① 4/23(土)

春の色をかさねる

— オリジナルブックカバーづくり —

14時より | 11階講堂にて | 定員20名 | 参加費 800円 | 対象 小学4年生以上

水彩絵具の特徴やさまざまな技法に触れながら、自分だけの色をかさねていきます。世界に一つだけ。春を感じるようなオリジナルブックカバーをつくります。



過去のイベントの様子



② 4/29(金・祝)

からだを変える・風景が変わる

講師：ペピン結構設計

HP▶<http://pepin.jp>

11時より | 11階講堂・美術館周辺にて | 定員20名 | 参加費1500円(昼食代込) 対象 小学生以上

身体感覚を変化させるエクササイズの後、お弁当とふしぎな「指示書」を持ってまちへ出かけていきます。演劇の手法を使い、普段とは違うからだで風景を再発見する、ピクニック型ワークショップです。

ペピン結構設計
横浜を拠点にいろいろな地域に出かけて行って作品をつくる演劇集団。家、まち、自然の風景など、さまざまな場所で「そこを劇場にする」プロジェクトを手がける。